

南山高校女子部

「by us」

2018. 12. 25 上演1

この物語は大きく二つのパートに分かれている。一つは女子高生がスカートではなくズボンをはき、将来の進路に消防士を希望し、坊主頭にした過去を持っていたりする、性別の境界線が曖昧な不可思議なパート。そしてもう一つは、私達が普段目にする、スカートをはいた当たり前の女子高生を描いたパートだ。この二つの世界を描くことで、私達の中の無意識の差別意識が浮き彫りにされていった。

前半のパートは、 Horizont幕の色が明るくカラフルになっており、ジェンダーレスの世界の非現実性をうまく表現していた。反対に後半のパートでは背景に色を付けず、明るい雰囲気を出すことによって、登場人物に性的な違和感のない、私達にとっての普通の世界に近い現実感をもたらしていたように思われる。

また、パネルを骨組みだけにして Horizont幕の色の変化を大きく見せることで、性的な差別のない世界とそれが実現されていない現実とのギャップをより強く表現していた。

前半のパートは明るくコミカルな雰囲気を持っており、それをキャストは生き生きと演じていた。そしてストーリーは一度ハッピーエンドを迎えるのだが、潜在的な差別意識が原因でかえって深刻な事態になってしまう。この展開には誰もが驚かされた。

音響については舞台転換の際、BGMの入りが非常に自然で、気持ちよく見られるという意見が挙がった。また、劇の始まりと終わりにあった、近づいてくるヒールの足音については、その音に女性らしさを見いだしてしまうことや、女性が犯人であるという真実に驚きを感じてしまうことから、ここでも、固定された女性観を捨てられない私達の意識に気づかされた。

私達は物語が始まってすぐ、登場人物の性別に違和感を覚え、それを探ろうとした。一人称に「俺」や「僕」を使う人物を演じる女性の役者に対して、髪を切って短くするべきだという意見を持った委員もいた。今、私達はそういった姿勢自体が差別だという事に気づき、後ろめたい気持ちを感じている。この物語を見て感じた違和感は、私達の差別意識が生み出したものだったのだ。普段生活していて「男子らしさ」「女子らしさ」に苛立ちを感じることはあったのに、性別を感じさせない世界を見て不思議だと感じてしまった。その上、この考えは差別的だと分かっているにもかかわらず、「女子が坊主頭」「女子がズボン」などの設定を変だと思ってしまった。

このように私達は普段、無意識に差別を行ってしまっている。それは、とても根深く、変えようと思っても変えることが難しい。後半のパートで、登場人物が偏見を押しつけ合うシーンを見て、自分達もその内の一人なのだと気づかされた。

南山高等学校女子部の皆さん、上演お疲れ様でした。